

参考文献

本文歌詞の音声などを、左の参考文献と突き合わせ、異同を確認して主なものを後註一覽に掲げました。

民俗芸能全集 琉球欽定楽譜湛水流（山内盛彬、一九六五年）

琉球古典音楽安富祖流工工四各巻（安富祖流絃聲会、平成八年）

声楽譜附工工四各巻（野村流古典音楽保存会、平成十八年等）

琉球楽譜の研究（宮城嗣幸、県指定野村流伝統音楽保存会、平成十四年）

改訂版舞踊節組歌詞集（野村流合同協議会、平成九年）

沖繩三線節歌の読み方（大城米雄、沖繩教販、二〇〇三年）

標音評釈琉歌全集（島袋盛敏、翁長俊郎、武蔵野書院、一九六八年）

琉歌大成（清水彰、沖繩タイムス社、一九九四年）

新公用文用字用語例集（内閣総理大臣官房総務課監修、ぎょうせい、平成十九年）

あとがき

現在までの沖繩語の書き方は、口語も文語も、書き手によりまちまちで、その様子は百花繚乱の感があります。沖繩の言語史を顧みれば、過去に、書法の確立を図る提案がなされても無益なものとして退けられたのは、沖繩語を公然と擁護することが許されなかつた時代の証といえましょう。しまくとうばの挽回が公認された今、書法の乱れは、しまくとうばを次世代に引き継ぐのに大きな障害となつています。日本語が歴史の試練を経て、誰が書いても同じになる書き方に統一されたのと同様に、沖繩語も誰が書いても同じになるように、加えて学習負担を少なく、学力が上がる書き方を見出さなければ、沖繩語は発展しません。本研究における問題意識の焦点はここにあります。本研究に対して多くの方々から率直なご意見を賜れば幸いに思います。